

2021 年度 U39 アーティスト・フェローシップ

応募状況について

本助成は、横浜から世界に芸術文化を発信する次世代のアーティストを育成し、そのキャリアアップを支援するための助成制度として 2016 年度より始まり、今回で制度名称を変更しながら 6 回目の募集となる。

申請状況については、応募総数 47 件の申請が寄せられ、美術分野 24 件・舞台芸術分野 23 件の内訳となった。
(2020 年度実績：応募総数 43 件) ※分野は申請者の申告による

応募 47 件中、所在地別分布では、横浜市 27 件 (57%)、東京都 14 件、その他地域 6 件。昨年度応募における横浜市在住者 53% (23 件) に対して、割合としては同数の申請が寄せられている。年齢分布は平均年齢 32 才、30 代 34 件(72%)、20 代 13 件 (28%) となり、昨年度状況と比べ、昨年に続きわずかに上昇している。

選考委員会は、フェローシップでは 5 名の有識者による審査員で構成される。選考にあたっては、それぞれ助成趣旨のほかに選考のポイントを掲げ、各項目について選考時の基準とした。

選考のポイント

地域性：横浜の地域や環境に根ざした、またはそれらに喚起された活動や芸術創造が期待される

国際性：国境を越えて共有できる問題意識や観点を有した活動や芸術創造が期待される

将来性：自身の芸術創造が広まる・深まる活動であり、今後国内外での活躍や発展が期待される

独創性：手法や形態、またテーマやコンセプトなど、優れた発想や独自性を有した活動や芸術創造が期待される

実現性：計画および資金使途が明確であり、活動規模や計画進行が妥当である

影響力：当該分野にかけて、また分野を越えて価値や活力をもたらす活動や芸術創造が期待される

審査員（敬称略／順不同）

小野晋司（横浜赤レンガ倉庫 1 号館館長、(公財) 横浜市芸術文化振興財団理事／チーフプロデューサー（ダンス））

木村絵理子（横浜美術館主任学芸員）

住友文彦（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）

藤原徹平（フジワラテッペイアーキテクトラボ代表、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授）

山口真樹子（ゲート・インスティテュート東京コミュニケーション&広報）

以上の方針の上で、各分野審査員による企画書査読と面談を経た後に選考委員会を開催した。結果採択は 6 件（うち前年度継続 2 件、採択率 13%）となった。

2021 年度 U39 アーティスト・フェローシップ

審査員総評

住友文彦（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）

この助成事業の良いところは、これから試みようとしていることを審査で重視している点だ。これまでの実績や作品を評価するよりも、相応しいタイミングで活動を支援できるように判断を心掛けた。だから、今回もし外れても支援できる時期がやがてくるかもしれないと思っていただきたい。

想像以上に新型コロナの影響が長く続いているなかで、作家同士の横のつながりを大切にしようとか、見直しや再演によって過去の作品を呼び戻すなど、作品制作と丁寧に向き合おうとする態度に触れることができた。また、いっぽうでまったく聞いたこともないような新鮮なアイデアに触れることもあった。助成申請は、それが独りよがりにならないために他の誰かに考えを伝えるはじめてのステップになることも多いだろう。

審査では、ただ作品を制作されるだけでなく、それが生み出す価値、制作を通して関わり合う人や機関など、この支援によってどのような循環がうまれるのかという点も重視した。個人が受け取る公的な支援だからこそ、自分以外の誰かが後押しし、その視点や評価が入り込むことを絶好の発展の機会としてほしい。とくに作品を受け止める相手は身近なところだけでなく、できるだけ幅広く想定してほしい。今後日本の芸術家が内向きになっていく心配をしているので、作品が異なる価値観のあいだに置かれ、国際的な批評の場をえられるようにぜひ活動してほしい。

今年もそうした理由から審査員一同、できるだけ多くの人に支援がいくように調整した。新型コロナの影響はまだまだ続きそうだけど、こういうときこそ問題意識を高く持ち、果敢に新しい試みに挑むことを期待しています。

藤原徹平（フジワラテッペイアーキテクツラボ代表、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授）

ACY の U39 フェローシップは、美術分野と舞台芸術分野の 2 領域にまたがる点がユニークである。私自身、創造行為の分野の縦割りが窮屈かつ退屈なものに感じるし、分野の垣根を軽々と超えていくような新しい面白さ・才能の登場を応援したいと考えている。

創造行為というのは難しいもので、今までにない面白いことをやろうとするとどうしても実験的になる。実験的なことは論より証拠でやってみないと誰もわからない。着想は面白いが実際はちっとも面白くないということもある。

アーティストはそれぞれ自分が進む道を実感的に捉えているはずだ。その進むべき道が、もしも単なる作品の世界に留まる場合、自分自身で、それが本当にすすむべき道なのか、疑いを持つべきだろう。アーティストが進むべき道というのは、人間としての生き様みたいなものだからだ。より人間的に、より人間の感性が大きくなるように、作品を展開していけば、かならずや作品が自分を遠くにつれていってくれるはずである。

フェローシップに選ばれた／選ばれなかったに関係なく、審査をしていて応援したいと感じるアーティストが何名かいた。ただ、その人たちのほとんどは、当人の課題意識が随分とこちらの感覚と違っていたので、個人的にはその点を残念に感じた。彼らは、各分野が抱える課題や、作品の社会の捉え方などを問題視し、そうした視点をこれからの活動の動機にしていた。これは上記の私の判断基準からすると、重大な問題にはなりえない。もっと自分自身の道をつくる大きなテーマを中心に据えて、作品を力強く展開し、その展開を通じて、いろいろな課題を振り切るようであってほしいと思う。

このフェローシップは、アーティストを育てるような場であるべきだと考えているので、フェローシップに選ばれた人にも、できる限り正直に感想や文句を伝え、次の素晴らしい作品を期待し続ける応答的な関係性でありたいと思う。

山口真樹子（ゲーテ・インスティテュート東京コミュニケーション&広報）

演劇分野の申請数がさらに減少したことを憂えています。パンデミックの状況が、支援する側の想像をはるかに越えて、集団で創作するアーティストに多大な影響を及ぼしているのではと危惧しています。本助成は作品やプロジェクトの実現のみに限らない、日本でも、そしておそらくは国際的にも数少ない助成プログラムです。新たな創造への力を養う、リトリートする、意見交換や交流をすることも、このプログラムでは評価が可能です。申請には気力が必要ですが、事務局の手厚いサポートもあります。今回申請を見送った方々には事前に事務局に相談するなどして、次の申請を前向きに検討してほしいと思います。

ダンスでは、横浜ダンスコレクションや Dance Base Yokohama といった横浜で展開されるプロジェクトや場所のサポートを受けている申請が複数みられました。同様のサポート体制を演劇分野にも確保する必要があると考えます。アーティストからの（潜在的なものも含め）ニーズの高さからいっても、また、支援側からは今般の状況下での本プログラムの一層の必要性を評価し、独創性と潜在的な国際競争力という観点からも、増額を含めた本プログラムの拡充を大いに望みます。

審査では申請書の良い点を極力見出すよう努め、地域性をおさえつつ、国際性・独創性・将来性を特に重視しました。審査会では、舞台芸術と美術という2分野の壁を越えて、昨年にも増して多様な視点から実のある議論が行われました。継続申請の荒木悠さんについては昨年度からの作品創作の完成・完結を見届けたく、またハラサオリさんには継続の強みや DaBY のサポートを活かし、本格的な作品上演への挑戦を期待します。高野萌美さんには、テキスタイルを用いた、観る者の自由な想像をかきたてる作品創作の更なる展開を期待します。急な坂スタジオのサポートアーティストでもある北尾亘さんは、おそらくは今が本助成による支援のタイミングではと考えました。この助成を十分に活用し、北尾さん独自の道を切り開いてほしいと願います。佐藤朋子さんにはレクチャー・パフォーマンスの「上演」が持つポテンシャルについてあらためて考えてみることを、佐藤未来さんにはその海外で培った作品作りの貴重な経験が、横浜での活動に十分に活かされることを期待しています。今回採択とならなかった申請者の方々、あきらめずに再度挑戦してください。

小野晋司（横浜赤レンガ倉庫1号館館長、横浜市芸術文化振興財団チーフプロデューサー）

ACY U39 アーティスト・フェローシップは、創造活動を広げたり、リサーチを深めたり、多様な領域の専門家と繋がったり、転換点にチャレンジする次世代アーティストを伴走型で支援するユニークな取り組みです。書類審査から面談審査まで一貫して「地域性」「国際性」「将来性」「独創性」「実現性」「影響力」の6つの視点で選考が進行しますが、フェローとして選ばれるアーティストが、この機会をいかしてどのように活動を発展させることができるのかという「将来性」が大きな意味を持つと感じます。コロナ禍にあっても持続的な活動を実践するための基盤の充実や、新たな視座に基づく多様な企画をサポートすることの意義について改めて意識する選考プロセスとなりました。

私にとってこの機会はつくり手との新たな出会いの場です。そして今回の47アーティストからの申請は横浜の創造環境に対する提案でもあります。創作活動における課題や問題意識とそれに基づく活動内容、今後のビジョンや横浜で取り組みたい活動について明快かつ十分に伝えられている提案や、それらが有機的に繋がって芸術の領域だけでなく地域や社会に新しい価値を生み出すような推進力のある提案について、今回高く評価できたのではないかと思います。ポストコロナを見据えながら社会の変化に応答して創作活動を継続すること、つくり手や関係者が孤立しない場づくりと次世代の養成に資する展開、より開かれた創造環境を目指して対話機会をつくりたいといった活動に期待しています。そして私たちはつくり手の創作姿勢やこれまでの活動プロセスといまを捉えるよう努めています。伴走型支援は受けるタイミングが大事です。決してあきらめることなく提案を続けていただくようお願いします。

横浜赤レンガ倉庫1号館では開館以降、横浜ダンスコレクション等のプログラムを通じて、創造環境の向上とつくり手の活動支援に力を注いできましたが、アーティスト間の連帯や創造性に基づくコミュニティとの結びつきは今後さらに重要になると思います。横浜を拠点に芸術文化に携わる人達と水平に繋がり新たな出会いに恵まれ、有意義な活動を展開してくださることを願っています。

木村絵理子（横浜美術館主任学芸員）

本プログラム開始以来、6回にわたって審査に参加してきました。申請者や個々の申請内容は当然ながら毎年変化していきますが、社会状況に応じるように申請者間での共通点を見出すことがあります。とりわけいまだ収束の気配がない新型コロナウイルス感染拡大の影響は、表現者や表現活動を後押しして広く紹介しようとする立場の人や機関にとって大きなブレーキになっていることを、昨年以上に強く感じさせる年でした。それは例えば、舞台芸術の分野では、集団での活動が前提となる演劇からの申請が少なかったことや、美術においては、海外での活動（自ら赴くだけでなく作品のみの発表も含めて）を視野に入れた申請が少ないといった形で現れたように感じます。リスクを最小限に、実現可能なことを着々と進めていくことは、困難な状況下における人間の選択として当然のことと言えます。一方で、表現者とは、一般の人には容易に到達することが難しい世界を垣間見せてくれる媒介者として、「安全・安心な一歩」とはレベルの異なる「ジャンプ」が可能の人であってくれることを、世の中は期待しています。そして本プログラムは、ジャンプのための助走に向けて必要な資金を提供するためのものであり、そのジャンプが成功するか失敗に終わるかは問わず、あくまでその過程を伴走するための支援です。

今回の審査会では、採択された全員に対して、申請書に書かれている内容以上に「もっと表現活動に対して貪欲になって欲しい」「自分がやろうとしていることが世界でどのように捉えられているかという視点を持って欲しい」といった、さまざまな「もっと」が、筆者のみならず多くの審査員の口から出てきました。困難な時期だからこそ、失敗を恐れずに飛躍の一歩を踏み出してもらいたいと思います。